



古庄直樹

アメリカンフットボール選手

こしょう・なおき●1978年生まれ。2001年から習志野市を拠点とするオービックシーガルズに所属。07年よりキャプテンを務め、10年よりライスボウル4連覇中。11年世界選手権では日本代表キャプテンを務める。現在のポジションはラインバッカー(LB)。オービックシーガルズの主将として約70人の選手をまとめ、コーチ、トレーナー、スタッフなど150人以上の大所帯を優勝に向けてマネジメントしている。一方で柔道整復師、鍼灸師の資格を取得し、治療家としても活動中。

アメフトと向き合う週末のため 毎日、すべての時間を本気で生きる

なので、首や肩を鍛えないと大けがをします。だから最初はずつと筋トレをやらされました。つらくてやめたいと思ったこともありますが、やめた後に学校で先輩に会うほうが怖い(笑)。それにやっぱ先輩がプレーする姿はカッコよかった。そこに憧れて、がんばりました。

**1つの武器を磨けば
誰でもスターになれる。
選手の多様性が
アメフトの最大の魅力です。**

でも本当にアメフトにハマったのは立命館大学へ入ってからです。フィールドでの練習が基本ですけど、それと同じくらいの時間を体づくりに費やしました。背中とかお尻とか、体幹を鍛えると、どんだん体が大きく、足が速くなっていくんです。それが楽しかったですね。
アメフトはミーティングも大事です。1試合で2000くらいのプレーがあるのですが、それを全部ビデオに撮って、1つひとつ確認していくんです。「このステップの角度はこう修正しよ

う」というふうに。体の向きをほんの少し変えるだけでプレーの質が変わります。ちゃんと自覚して修正していく選手はほとんどうまくなります。

アメフトがおもしろいのは、チームメイトの体型も特徴もバラバラなことです。体重130kgの巨漢が崇拝される一方で、小柄だけど足がめちゃくちゃ速い選手もいる。ボールを蹴るスペシャリストもいれば、50m走では負けるけど5m走だったら誰にも負けない選手もいる。なにか1つの武器を持っていれば、そのポジションで一流になれるんです。

大学時代は寝ても覚めてもアメフトで、「明日はオフ」と言われるとガツカリするくらい。学生日本一にもなりました。

**仕事を持ちながら
競技を続けることの
大変さとおもしろさ。
生き方を問われます。**

社会人になって、オービックシーガルズで出会ったアメフトがまた僕を成長させてくれました

た。クラブチームなので、平日は皆それぞれの仕事と個人的なトレーニングをして、週末だけ全員で集まります。

前日まで海外出張だった、と言いながらものすごくハードな練習をする人がいれば、仕事で遅くまで接待があっても、翌朝全力でプレーをする。試合が終わったら子どもを抱いて帰っていく先輩も。人生にはいろいろあるけど、アメフトが好きだという思いは一緒。週末にアメフトをやるために、毎日職場でも家庭でも本気で生きているんですよ。それぞれの生き方が本当に魅力的です。「こんなにおもしろい人たちと、こんなおもしろいアメフトができる」というのが今の僕の喜びです。

僕自身は、高校時代にお世話になった整骨院の影響もあり、6年間マッサージと鍼の勉強をして、治療家になりました。去年、東京の東銀座に治療院を開き、平日はそこで働いています。



2009年以来5年ぶりに1stステージで黒星を喫し、ディビジョン2位で2ndステージへ(右から4人目が古庄主将)

**団体競技で
日本一になりたい。
その夢に向かって
泥まみれの青春でした。**

子どもの頃ぜんそく持ちで、3歳から水泳を習いました。でもずっと「1人で泳いでもおもしろくない」と思っていました。小学校、中学校と野球をやって、そっちのほうが断然楽しかった。団体競技のほうが合っているんでしょね。でも、僕の力量では野球で日本一にはなれない、なにか日本一になれるスポーツをやるうと思って、高校からアメリカンフットボールを始めました。

関西大倉高校のアメフト部は先輩がとにかく厳しい。1年生は校舎内を移動するとき「走る」と決められていて、歩いているのが見つかったら「たるんでる！」と説教される。先生は「廊下を走るな」と言いますけど、僕は先生より先輩のほうが怖いので(笑)、つねに走っていました。

アメフトはぶつかるスポーツ

36歳まで現役を続けるなんて思ってもいませんでしたが、自分にしかできないプレーがあるうちは続けようと思っっています。ありがたいことに、チームの本拠地である習志野市の皆さんの応援も年々増えています。市長も観に来てくれるし、東京ドームで試合をしている習志野市民が固まって応援してくれている席が見えるんです。熱い応援には、勝利でしつかり恩返ししたいと思います。